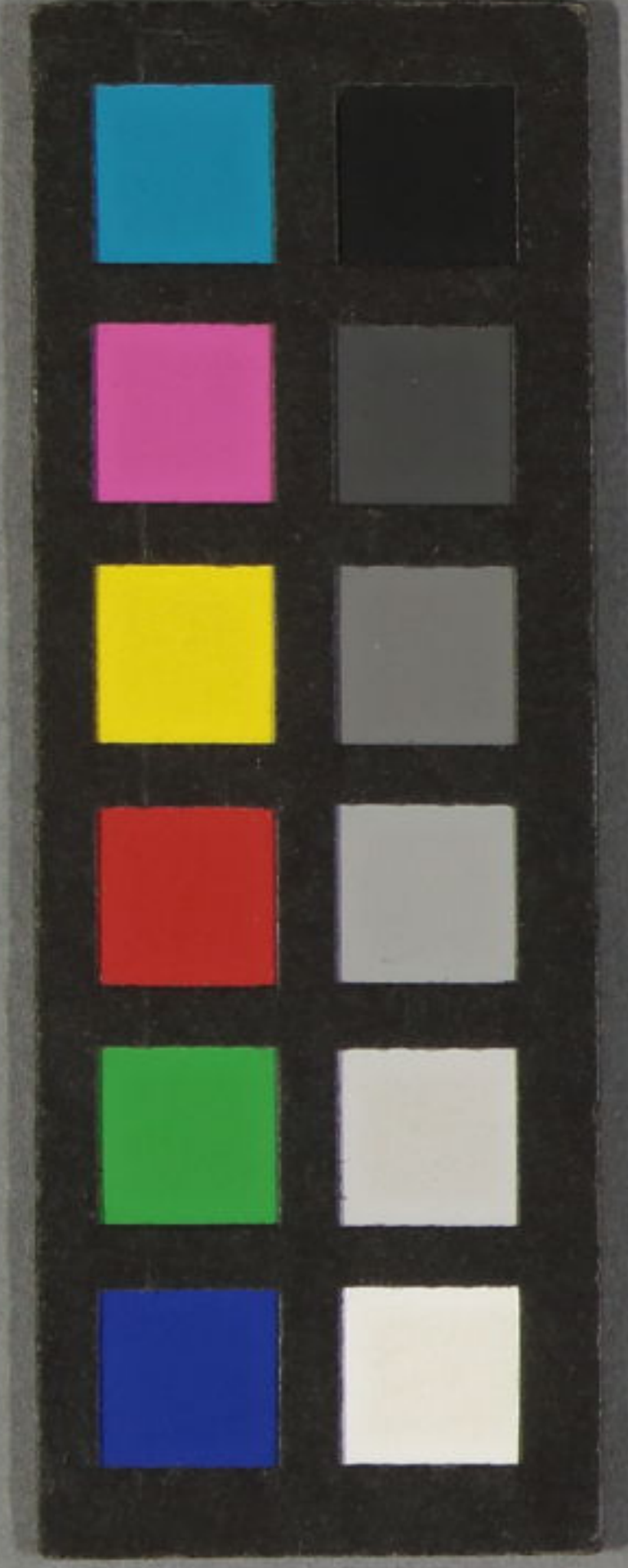


馬臺詩餘師全



吉備大臣大入野臺讀圖
吉備大臣大入野臺讀圖



野馬臺詩

經典餘師

錦彩堂藏梓

野馬臺の文六梁

の禪僧宝誌和尚

作^つ亦^も宝誌姓ハ

朱氏金城の人事ハ

高僧傳小出昔時

宝誌行道の日化女

忽然くて来て

語^つこと奮^ふり相^あ

識^しと^り如^し一^の女^を去^る

是^の一^の女^を來^り如^し斯^く

と^りと^り一^の千^八人^と

皆^の國^のの^始終^をを^云

和尚^の性^を千^八人^の

女^をを^以て^字を^作

是^の則^に傳^のの^字と

あり^仍て^倭國^の

神^のを^知る^彼

女^のの^言を^認て^一

十二^韻の^詩を^作

將^來の^胎を^日本^に

始定壤天本宗初切元建

終臣君周枝祖興治法主

谷孫走生羽祭成終事術

填田魚膾翔世代天工翼

孫子勤戈葛百國氏右輔

昌微中干後東海^首姬司為

白朱水寄胡^尾空為遂國喧

龍游窘急城土茫茫中鼓

牛食食人黃赤與丘青鐘

腸鼠黑代難流畢竭核外

丹盡後在三王英稱犬野

水流天命公百雄星流飛

首是より讀^をめ東海^首姬^尾氏^尾國^尾と^尾罪^尾引^尾の^尾通^尾

不^尾茫茫^尾遂^尾為^尾空^尾と^尾尾^尾是^尾より^尾讀^尾畢^尾る^尾國^尾字^尾

附^尾末^尾ふ^尾あ^尾と^尾六^尾見^尾あ^尾ら^尾せ^尾し^尾む^尾べ^尾

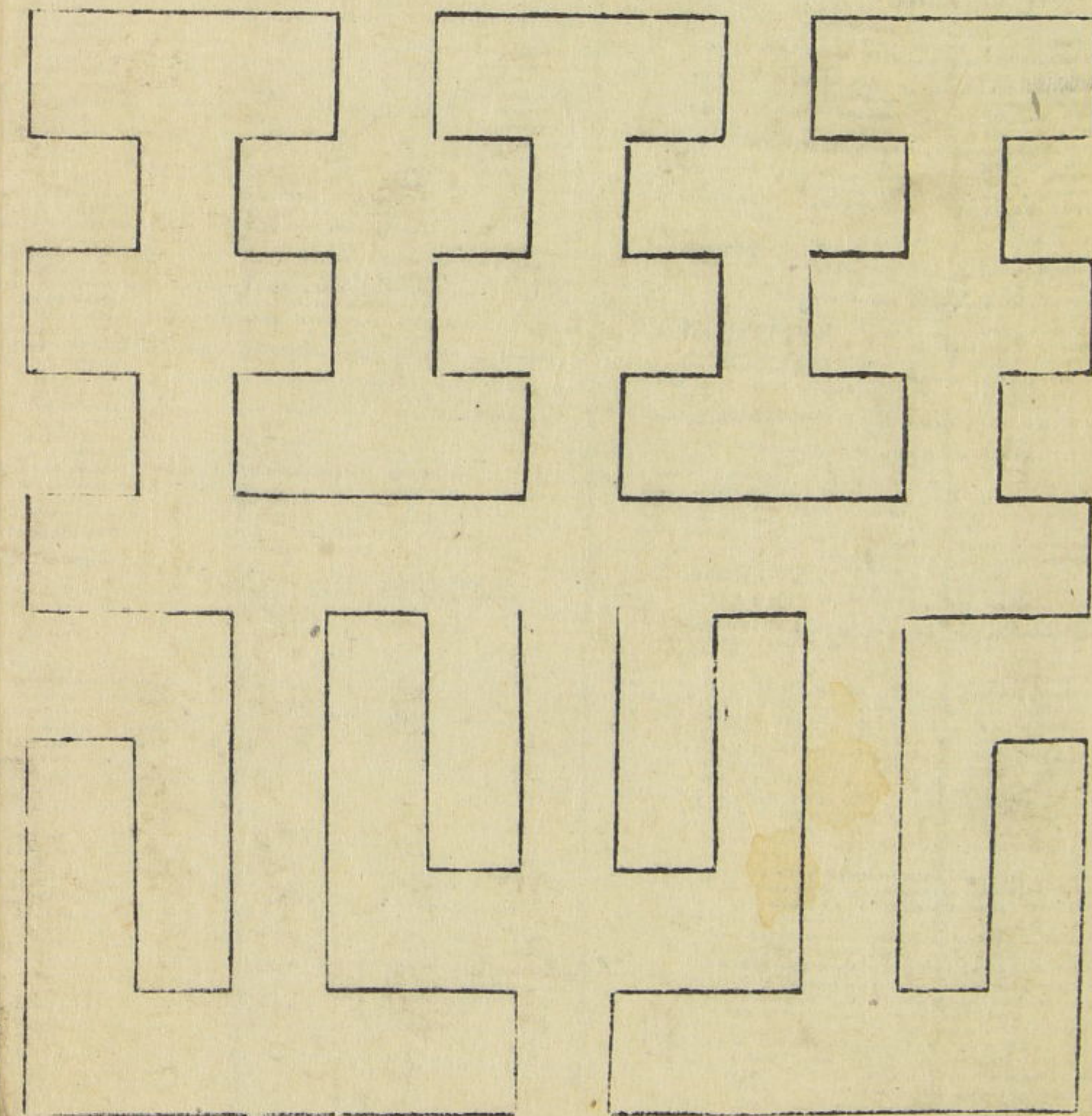
予馬臺

予馬臺

予馬臺

の識文之吉備大
 臣武帝の前是
 を識不日頃祈念
 を本邦和州長谷
 の觀音蜘蛛と現
 縁を身之識し梁
 の詔公是觀音全
 して自倭國の識文
 を作らるも知るべ
 らるべし云云

蜘蛛の糸を曳く圖



世小傳ふ往昔日本より大唐へ貢を奉び其使を遣唐使と云人王
 四十五代聖武天皇の御宇宰相安倍仲九遣唐使として官物を
 貢む此時異朝の天子を梁の武帝と云官物の微少なるを忿て仲九
 を攻め陳と云我萬里の波濤を離れ遠旅の客とされ八數の賊室
 を携せ願ひ皇帝怒を宥て後度の入貢を待り武帝忿止せしを竟
 不仲九を荒原の叢不殺さる説高樓不其の魂悲恨と青天を昇て鬱
 陶の赤鬼と成動せれば帝不迫て慨恨を為す其次の遣唐使ハ吉
 備大臣之此時仲九が魂來告て云我ハ仲九之官物の微少不仍て殺と
 其冤深し故不赤鬼と成荒原不住て日本を慕ふ熟先事を思ハ
 紅涙連くく君も又責らば我是を惻隱故不此事を公不告と

予馬畫

吉備公明朝参内一官物を献ぐる帝又官物の微少を称して
 吉備公を責んと然る國の法を外る死を殺さば其之能を試
 て達せざる者ハ殺す是不於巧議て日本いごと圍碁を知りて吉備公
 小圍を勝らんハ戮す一と百官皆吉備公の萬死を思ふ其夜三更の
 頃鬼又來公不出て云君明朝碁局ハ勝らんハ勿忽殺せん公愕て我未
 圍碁を知らば其法如何鬼云碁局ハ盤面四九三百六十の目黑白の
 小石三百六十箇有て一歳の中教ハ配を黑白ハ上十五日の月の白光と下
 十五日の月の黒魄ハ象了是を以互ハ盤面ハ置て兩日相續を生と
 續ざるを死と云と教公を鬼の脊ハ負て紫宸殿ハ上りと通夜圍
 碁を見せしむ明日公を召て碁を圍し公竟ハ勝て死を
 免る次ハ武帝又議と昭明太子作る所の文選を與讀と能
 むんハ殺さんと其夜又鬼來て云帝多ぐるの謀あり帝常ハ
 文選を好て讀ゆ公今宵我ハ從聞ゆと公を脊上ハ負帝座
 近く隠て帝の讀を聴しむ因て吉備公明日是をも讀得て免る
 第二ハ乱行不同の文を作て公ハ讀を免ると宝誌和尚ハ命せし
 此僧神ハ感ぜると有野馬臺の文を奉る學士群集して讀ハ
 其理を知む五言十二韻百二十字扶桑の識文也鬼又告て云此般の謀
 ハ我ハ善く我本邦の神佛ハ祈て求りゆと云畢て去公大ハ驚懼止
 日東小向ハ額拜誓首て伏て云冀ハ佛天の加被力を以て一字二言滞る
 誦しゆると天ハ仰地ハ俯血泣懇禱を殊ハ公常ハ和州長谷寺の

觀音を信む此時觀音大悲分身の化を垂つ蜘蛛と現ト公を
 救り明日殿上此書を読み文字紛乱義理辨難これ八意を心
 腦愁ふ時一蜘蛛下來東の字不落漸歩糸を曳其行蹟有
 因て是を讀み察然とて開明公畢讀得て唐人皆歎美を公爰
 不於て萬死を出て恙なく歸朝するを得たり大士の感應實む
 敬ふ云吉備公飯朝の後此書を秘して傳ぶ後代此文あれを讀
 むのほ五平代桓武天皇の御時野相公小野岑守の子野相公野相公の子の勅勅に読まらぬ
 殆克を竟小長谷寺に詣て三七日祈誓を大士又應感の化身蜘蛛
 と現トと誌す是より本朝盛行となり故り觀音の悲願愈
 著しく此文を稱して日本の未來記と云

蜻蛉を野馬と云臺八國と云意之日本國の形象蜻蛉
 小似たり又云日本最初小生る國大和也此故日本の總
 名も大和といふ則ち野馬臺之莊子逍遙遊の篇小野
 馬也戲埃也云春日澤中の遊氣野馬の馳る如きを
 以て陽燄とれ之を以て野馬臺の出所とするハ非あり

東海姫氏の

東海姫氏國

百世代天工

百世天工の代

唐より東の方の海小有姫氏の國之姫姓ハ后援小出て
 周も則ち姫姓之周の祖先具の太伯日本小來て國を闢也
 姫氏の國といふ又一説小宗唐天照皇太神女體小在す故
 姫氏の國といふ姫ハ婦人の美稱之百世ハ大數を興すといふ

野馬臺

右司輔翼

爲主元功

建

天神七代地神五代の時民を理治る人意は天の地
地の造化天の王と云ふもの百世の後其天正小代りて
王世小出て民を治政を執行ひぬる
右司爲輔翼

衛主建元功

神代小津速産靈神の孫天
兒屋根命高皇産靈神の

子天太王命二人天照太神の勅小仍て左右の臣に
輔翼て政を成ぬ神武帝東征して長驥彦のこゑ

命小逆ふ者を征伐して國を治めぬ時又彼二神の
子孫天種子命天富命左右輔翼の臣なり右司と云

左の字も兼る衛主ハ用明帝の皇子聖德太子衛岳
の惠思大師の後身として衛主といふ主ハ崇る詞ハ大

三千代推古天皇の朝小攝政とあり冠位十二階を定め
位の高卑當色の絹を以て冠をわけて諸臣小たす

日本冠のそとまりと元ハ大の意聖德太子執政り
大なる功を建たまふをいふ

初興治法事 終成祭祖宗

初興治法の
事を興
終成祭祖宗を
祭を成

聖德太子初小十七條の憲法を定め國を治るの事を
興一終成先祖宗換の祭祀を成一本を忘る事トさ
を教へ示ぬ論語ゆ終を慎遠を追ときハ民の
徳厚小歸まるといふり
治法一本作和法

本枝周天壤 君臣定始終

本枝天壤小
周君臣始終を
定む

君ハ本と臣ハ枝天壤ハ莊子小も出て天地といふ小同
一ものつちと訓む上下和睦一子孫天地小周く
榮まる君ハ臣を愛む下ハ上を敬ひぬる已當職を
安ん一違差さる事終まで始のこらく小定る皆太子

谷填田孫小

走り

魚膽羽を生

しつて翔る

の功多をいふ聖人も始あざる
とほ克終あると鮮と宜り

谷填田孫走

魚膽生羽翔

谷八昇く賊者の謗論田八敷
用のあつた所貴人小たふ其貴人

の子孫賊者の為小逃走魚膽も賤きもの位を竊る
時小乗一説小天智帝の御子大伴の皇子亂を起し

陵谷の變あるをいふ天武帝大伴小襲と共あつて
位小復あつた膽炙小製する魚鳥の羽を生し飛翔る

とくあるをいふと天智帝始め御位を御弟天武小
あつたをいふとあつて又後小御子大伴の皇子を太子

と定めあつた天武難髪まじく芳野小隱とあつた
天智崩御の後大伴謀る天武を失つんとしあつた

美濃国小の皇子高市の皇子不破の関
軍して東国の通路を塞ぎ吹負を大伴と

江川の都をせめあつた大伴戦ひ負て勢田少く討死
た是ふあつた天武即位しあつた是四十代の帝人

葛後干戈動 中微子孫昌

葛藤の葛藤姓の隠語後藤原氏後武智丸
第二子惠美押勝小至干戈の騒乱あるをいふ藤姓ハ

天兒屋根命以下子孫代々朝廷の扶翼より二十三代
の孫鎌工八鹿を討て功あつた藤姓を賜ひ名も鎌足

と改む其右押勝の時孝謙帝の寵を得たりし小帝又
弓削の道鏡を愛せらるるを恨み廢帝を勧め謀

叛を起し竟小敗軍一帝ハ淡路へ流さるる小押勝
ハ誅せしむ此後藤氏衰ること久しき中微子

といふ五十六代清和帝の朝小先帝文徳の遺詔不
て藤原良房帝の外祖とるをいふ攝政とる後

葛の後干戈

動

中微子孫

昌あり

忠仁ハ公ト云フ是あり爾來彼子孫連綿トナリ又重職ハ任スルカ子孫昌トナリトナリ

白龍游失水 窘急寄胡城

白龍游水
を失
窘急して胡城小寄を

白ハ庚の色龍ハ辰ノ四十六代孝謙女帝天平十二庚辰の誕生也此帝在位姁行度有ク道鏡を罷シルハこと太過リ此故ハ九族親シテ諸臣朝セバ民の望を失ハ是白龍の放リ游遊テ其遷所の水を失ハハる不等一窘急ハ迫困ムト都を捨去テ道鏡の跡を慕ヒ下野の薬師寺下リルハ一を胡城小寄トシハ胡の字ハ帝城小對シルハ一宮小帝を龍ト比スルハ通例ナリ白ハ赤小對スルハ陰之孝謙帝女主也又自龍トシハあり

黃雞代人食 黒鼠食牛腸

黃雞代人食
て食
黒鼠牛腸を食ふ

黄ハ巳の色雞ハ酉ノ平親王持門寛平元巳酉小生也野洲相馬小内裏をわまシ百官を従ス東ハケ国小自平工と潘抄ト人小代テ食ふの謂ト黒ハ土の色鼠ハ子ノ平相国清盛長承元年壬子小生也保元平治の乱小源氏トナリハ為美以下を討亡シテ威を海内小ふるハ官太政大臣小シテ好を高倉帝の中宮小入シ建礼門院トレ之後白河帝ハ鳥羽小押シ高倉帝を新院ト称シ政事トシ青盛の手小出四海を腦乱セリ君臣の礼を乱リ祭祀を奉セバ己其肉を食ふト牛腸ハ異国祭祀小獸肉をもち而シテ假テ小日本也佛教入リテ前ハ是トク祭小肉食を供セリト

丹水流盡て

丹水流盡後 天命在三公

天命三公在

禁庭を丹澤といふ丹水、帝王の恩澤ふたふ丹ハ陽の赤色水ハ潤澤ハ壽永の乱小安徳帝入水一ハ一後王道衰弊一政諸侯より出るを天の命三公有といハ異朝ハ太師太傅太保を三公といハ日本ハ大政大臣左大臣右大臣ハ美朝の三男右兵衛佐頼朝美旗をとりて平家を傾け天下を平治せる大カみ依て日本惣追補使を賜りし以來天下の政道再といハ天子のうごさるるれハ三公ハ頼朝頼家実朝の三卿ハ通をといハ

百王の流畢

百王流畢 猿犬稱英雄

猿犬英雄を稱

百王代ハの流畢ハ竭て後ハ申戌の歳ハ人出て威四海小加ハんとハ山名右金吾入道宗全應永十一甲申小生也細川右京兆勝元永享二庚戌小生れ英雄の名を稱せし應仁の大乱あり英ハ草の精秀あるもの雄ハ獸の群小をさるるをハ假人ハ人の抜群ある小たると

星流て野外

星流飛野外 鐘鼓喧國中

小飛 鐘鼓國中 喧

伏羲氏の古昔天の恆星を以て万民小論ハ星流て野外小飛ハ乱を憂て天下の庶民野外ハのれ走ると國中ハ責鐘攻鼓のあゝ喧ハと戦乱をあらはと極るの謂あり

青丘と赤土

青丘與赤土 茫茫遂為空

與
茫茫とく
遂小空と爲
ん

青丘ハ新羅の国松樹多く青くするを以てその南小
あつる日本国ゆゑ南方丙丁の色を假り赤土と云
二国とも小終小茫くする空き荒野と云又
一説小末世多く野原小墳墓を築くを青丘と云
田畑もあつたれ赤土と云又一説小是も應仁の乱
小畿内焦土とあり或ハ青州を生むるを以て茫
ハ廣くするを以て

辨正

○野馬臺の詩ハ本朝一人一首卷の九小出て人口小傳稱
まると舊其解の如き述る所のとく傳來り然ども不替

孟浪の作とるる學者皆知所其二三の辨論左の如し

○四十五代聖武の御時仲丸遣唐使して梁の武帝小見る
このと共梁の時我國二十六代武烈帝御治世あり聖武

帝の御時異朝ハ唐の玄宗帝はて二百餘年差あり

○遣唐使の始ハ三十四代推古帝の御時よりの事とつら
朝の史を按むる小四十二代元正帝靈龜二丙辰八月多

治比の縣守遣唐使より藤原宇合副使より此時下道

眞備吉備公のとき阿倍仲磨時小十學問の爲小入唐を此以

前も遣唐使のとも梁の武帝の世小未有之推古帝
の御時彼国ハ隋の煬帝小當るを始とハ最仲磨の年

歷ハ諸書紛々しよあふんたり仲丸吉備同時入唐しよあふんのてハ史しハ三さんより王代一覽わうだいいつらん和漢年表等わくわんねんひょうとう小出せうしゆつ所大同小異しよたうしよせうい之

○官物微乏くわんぶつびひう之し仲丸ちゆうまわを殺ころめ子細こさいく吉備公きびこうハ国法咎くわふつたうるを殺ころさばびと三さん之しの難事なんじを計しらるハ如何日本いかにんまま罪つみあり仲丸ちゆうまわを殺ころさす其不禮そのふらいをも問とがむ次度じどの唐使たうしを渡わたま如ごとき柔弱じやくじやくの国くにハあらば本朝ほんてうの威武ゐぶハ異域いよくも知しる所ところハ一いつ之し我國わがくにハ不敬ふけいをあらうることを聞きむ人ひとの能の否ひハ生質なまねありを不ふ戈さの人ひととし是これを殺ころせ国法こくふつわんんや況贈物きやうせつぶつの多寡たがを心こころにして使臣ししんを好惡こうあくする卑劣ひりやくハ夷狄いひの王わうたりともあらあるべしや

○仲丸を彼国かのくにへ尊たうと和漢わくわんの記録きこく見みへり仲丸ちゆうまわ彼土かのち小留學せうりやうセし明めい之し近ちかく人ひとの知しるハ唐詩たうし五言排律ごげんぱいりつハ秘書ひし晁監しやうかんが日本にっぽんへ還かへるを送おくる王維わういが詩しハ仲丸ちゆうまわ玄宗帝げんせうていの時とき秘書ひし監かんの官くわんハ本邦ほんぱうへ歸かへると有あり其送別そのそうべつの詩しハ仲磨ちゆうまハ後のち壽じゆを以もつて唐土たうど小卒せうそつたりと必定ひつたうるを荒原わらげんの赤鬼せききと成なるは浮屠ぶと層氏人じやうしじんを惑まどへり僻説へきせつハ唐書たうしよ列傳りつてん二百二十にひやくにじゅうに小曰せういふ朝臣てうしん仲磨ちゆうま易姓名えきせいめい曰いふ朝衡てうかう是仲丸ちゆうまわ之し又晁衡しやうかうとも書かへり

○日本和州長谷寺にっぽんわしゆちやうこの觀音くわんおん吉備公きびこうの懇祈こんしハ仍なほて一夜いちやハ千里せんりの海うみを涉わたり彼地かのち小蜘蛛せうこくろと現あらわる誠心まことこころの感格かんかくハ左ひだりも

有んぞれを自在あると云ふ赤鬼又何を神通を以て讀を教ざるや

○五代桓武帝小野の篁命ト云野馬臺と讀あり命

能むしく又觀音小祈るといふ不審篁六五十二代嵯峨帝の弘

仁年中仕つて參議に至り五十五代文德帝仁壽二壬申

十二月二十二日小卒と有桓武帝の御時といふん觀音

再度も蜘蛛と現むる頗不自在ありと云ふ可笑

○梁の宝誌和尚此文を作ると云ふ附會の説あり一何七

殊邦千歳の後を豫めとらんや聖德太子天王寺の未來記

等の奇説を擬して杜撰するものあり又宝誌八聞の碩德

の僧るれば華麗の文を作出まじ周興嗣が次韻也千字文如

き小至を共此野馬臺の文僅二百十字して流三字百二字終

二字中二字後二字天二字国二字水二字孫二字代二字爲

二字何を斯不自在ありや文小同字を諱とありんども

拙小似たり文勢小於ても一句の感吟まじ處無をや作者

和漢の歴史を子細せし強て兒女子を迷しむ殊小我口

本ハ七代五代の神を祖に自他各神の苗裔なりある哉

姬氏の国と云て異国の孫に始小聖德太子を登美しとるハ

全く浮圖氏の手小作せり其以下大伴の乱孝謙女帝の

穢行より相国清盛三公等の句不當の証言多し

○孝謙帝を庚辰小生と云ふを云へ白龍と云ふも差なり養老

三己未小生との神護慶雲四庚戌八月四日五十一して崩御と

○清盛を壬子小生と云へ黒鼠小論を左小あり元永元

戊戌小生と養和元辛丑閏二月四日六十四して逝去ある

是をりて其他年歴の差違を察せし

○青丘を新羅のことと云扶桑未來記と云野馬臺の文小

他邦の預る所ありて未小鐘鼓國中小喧といひ結句小茫くと

して遂小空とあるとた不善の語をるは此作者室誌和尚の

名ハ假とも若日域の人と云ふ國朝を憚る昏愚の罪人とせし

安倍仲磨傳

安倍昔ハ阿闍と云ふを新撰姓氏錄元明帝の御諱也改るを孝元帝の

皇子大彥命の後とあり父祖所見あり中務太輔船

守の子と云又船守ハ同船せし人の名とも云實證これあり

天龜二年唐の玄宗八月多治比真人縣主等遣唐使

の時仲磨と留學生と云へ入唐せしめゆ仲磨朝臣の朝

を氏と云名を朝衡と改む晁衡とも云へ朝舊唐書

新唐書見あり一説小使を奉と云へ日本の父

母不歸家一再唐入安史が乱逢て終ふたるに
 或ハ儀王不友たり或ハ新羅不在書を附て故郷の
 親族不送とありども再入唐するにあつて續日本紀より
 天平勝宝遣唐大使藤原朝臣清河卿副使以下入唐
 一其復命の時晁衡も本邦不歸らんとて明州の
 津不船出する時別を惜て詩を贈る王維が詩ハ唐詩
 選排律不出包信が詩ハ文苑英華不出此時海の面不
 月さりのづるを見て我国火神代より斯歌を詠とて
 天乃原布利佐計看礼波春日奈留三笠乃山不出月加毛

古今和哥集羈旅の部不入詩と作りし一文苑英華
 不出既不唐主を去て大洋不艦を解する暴風荒波の爲
 不唐主吹反さる仲満溺死を聞ゆ李太白哭晁衡詩
 日本晁卿辭帝都征帆一片繞蓬壺明月不歸沈碧
 海白雲秋色滿蒼梧と作り然不仲満恙ありして
 再唐帝不奉仕せり清河卿も竟不四十六年留學して官秘書
 監より左補闕を経へ左散騎常侍鎮南都護不至侍從の
 臣より唐書不出一説不七十ニ歳トス関国公不封下潞州大都督不
 贈られ日本より贈官正二位を賜し光仁帝宝龜十年

唐太宗 五月前學生阿倍朝臣仲磨唐小在亡 本朝の家
口偏小之 葬礼欠とあり勅て東絶百匹白綿三百屯
を賜と續日本紀小見ゆ

仁明帝兼和三年 唐文宗 五月附聘唐使贈遣往歲銜本朝命

入唐使並留學等在彼身没者八人位記以慰幽魂仲磨

其一人也 續日本後紀

詔詞曰

故留學問贈從二品安倍朝臣仲滿大唐光祿大夫右

散騎常侍兼御史中丞北海郡開國公贈潞州大都

督朝衡可贈正二品身涉鯨波業成麟角詞峰聳

峻學海揚濶顯位斯昇英聲已播如何不慙莫

遂言歸唯有檢天之章長傳擲地之響追賁幽

壤既隆於前命重叙崇班俾洽於命詔

和漢の記録小顯然とて其正まきの斯の如し此

外班とる書小見ゆ多しといども取る足らざ

弘化三丙午年夏六月刻成

本所表町

東都書肆

菊地虎松梓

蕭 經 野 蕭
籟 典 野 籟
鐘 餘 馬 銘
曰 師 臺 曰
新 經 曲 苟
新 歸 曲 日
師 餘 師 新
自 自 自 自